

## 芍薬&牡丹の巻

### 芍薬と牡丹を見分けることができますか

芍薬(シャクヤク)も牡丹(ポタン)もポタン科ポタン属です。諸兄姉は芍薬(下写真左)と牡丹(下写真右)を見分けることができますか。実際に英語では、委細構わず両方ともピオニー(Peony)としています。そこで、即興俳人の高幡大馬王殿はツアーガイドとして京都二条城の御殿内の「牡丹の間」の案内をしたときに「立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花」をモジって、「立てばピオニー座ってもピオニー歩く姿はリリーさん」と英語の俳句っぽく紹介したところアメリカ人のご婦人ゲストに大いに受けたそうです。素敵ですね、高幡大馬王殿のようなツアーガイドに巡り合うと日本の花の姿も生き生きと心に残ることでしょう。



### 立てば芍薬座れば牡丹

即興俳人の高幡大馬王殿によると、中国では芍薬は「花の宰相」、牡丹は「花の王」と対比されるそうです。中国で「宰相」といえば歴代中国の王朝で君主を補佐した最高位の官職またはその通称のことですよ。どうも芍薬を牡丹より下位に見ているように思えます。そこに行くと、百合もまじえて、見分けのつけにくい芍薬と牡丹を並べ立てた「立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花」という言葉を作り、「女性の美しい立ち振る舞いや容姿を花にたとえた表現」として使い続けてきた日本人の花に対する感受性にはとりわけ素晴らしいものがあるように思えます。芍薬、牡丹、百合の花は、ひとつひとつの花が美しいばかりではありません。開花の時期を見ると、5月は牡丹、6月は芍薬、7月は百合というように、リレーするかのように順番に咲く名花なんですね。そのうえ、真上にまっすぐ伸びる芍薬を思わせる美しい立ち姿から「立てば芍薬」、低い位置で咲く牡丹の花を思わせる美しい座り姿から「座れば牡丹」、風に吹かれて揺れている百合

を思わせる美しい歩き姿から「歩く姿は百合の花」と並べて比喩表現しているのですからなかなか訴求力があり、「真の美しさというのは、姿の美しさばかりでなく、立ち居振る舞いや香りといった内面の部分まで綺麗じゃなくてはならないんだぞ」と、真の美しさ欠乏症候群にさいなまれている現代の日本国民に警句を発しているようにも思えます。

## ずっと立ち上がる茎先に大輪の花を咲かせる芍薬

さて、このうちの牡丹がボタン科の落葉小低木で、枝分かれをした先に豪華な花をつけるのに対して、芍薬はボタン科の多年草で、すりと伸びた茎の先端に美しい花を咲かせます。その香りもおやかで、フランスではしなやかで爽やかな香りのするワインを、「芍薬のような香り」と言うそうです。シベリア、中国、モンゴルの原産で、日本には古く中国から渡来し、当初は消炎薬や鎮痛薬などの薬草として利用されていました。のちに観賞用としても栽培され、江戸時代には「茶花」として鑑賞され、品種改良も行われた古典園芸植物なのだそうです。芍薬の「芍」は「鮮やか」「はっきり目立つ」「抜きん出て美しい」という意味で、「薬」は文字通り、当初は薬草として用いたことに由来するのだとか。もっとも、花名のシャクヤクは、「姿がしなやかで優しいさま」を意味する「綽約(しゃくやく)」に由来するともいわれており、属名の学名「Paeonia(パエオニア)」も、ギリシア神話で神の傷を治したという医の神「Paeon(ペオン)」にちなんだものとも言われているそうです。花は一重、八重があり、花色もピンク、白、赤、黄、オレンジ、青、紫など様々で、多くの園芸品種がありますが、いずれも、枝分かれせずにずっと立ち上がる茎も美しく、その先に大輪の美しくくっきりした花容の花を咲かせるので人気があります。バラに似た爽やかな香りを持ち、「5月のバラ」と呼ばれたり、ワインの香りを表現する言葉として「芍薬の香り」といわれたりしています。

## 芍薬の花言葉は「恥じらい」、「はにかみ」と「謙遜」と

芍薬の花言葉には「恥じらい」と「はにかみ」と「謙遜」があります。英語の花言葉は「bashfulness(恥じらい、はにかみ)」「compassion(思いやり)」で、この由来には、はにかみ屋の妖精がこの花にかくれたところ、花も一緒に赤らんだというイギリスの民話に由来するという説、夕方には花を閉じてしまうことにちなむという説などの諸説があり、英語には恥じらいやはにかむ仕草を表す慣用句の「blush like a peony(芍薬のように顔を赤らめる)」もあるのだそうです。牡丹が樹木なのに芍薬は草本なので冬期には地上部が枯れてしまいます。また、芍薬は、牡丹よりもやや小ぶり(花径10cm程度)で、重厚さでは牡丹に負けてしまいます。しかし、牡丹より端麗で若々しい印象を与え都都逸に「立てば芍薬」とうたわれる名花にしては、「恥じらい」、「はにかみ」、「謙遜」といった花言葉は地味すぎるような気がします。そこで改めて「花言葉」について調べてみますと「花などの植物に対し象徴的な意味を持たせるもの」とありました。そうです、花言葉は花の美しさをたたえる言葉ではなかったんですね。英語表現でも”language of flowers”です。まさに“耳傾けて聴くに値する花の言葉”だったのです。ただし、文学の世界にも、この美しくも奥ゆかしい花言葉を表現するのが難しいのか、高幡大馬王殿は「芍薬はあまり俳句となじみがないせいか、角川歳時記でも例句は6句しか載っていません。」と語りながら、以下の通り一言添えて“芍薬で一句”のリクエストに応じてくれました。

・芍薬や 天海祐希の 清しき瞳(め) 高幡大馬王

「立てば芍薬」の凜としたイメージが、私がお鼻の元宝塚男役トップの天海祐希を彷彿とさせます。

## 牡丹は優雅な花を咲かせる“樹木”なのだ

牡丹と芍薬はともに、日常的な場面では「Peony(ピオニー)」と称されることが多いのですが、牡丹の英名は「Tree peony(ツリーピオニー)」で、芍薬の「Chinese peony(チャイニーズピオニー)」ときちんと区別されています。牡丹は

「幹が直立して、低い位置で広がるように枝分かれして優雅な花を咲かせる“樹木”(落葉小低木)」なんですね。原産地は中国西北部で、「芍薬」と同じように、「牡丹」という和名は中国の花名「牡丹」がそのまま使われているのですが、牡丹と同じころに日本に伝わった漢音では、「牡」が「ボウ」と発音されるため、当時は日本でも「ぼうたん」と呼ばれていたとのことで、現在でも俳句や短歌などの世界では「ぼうたん」は健在なのだそうです。しかし、「牡丹」の由来については定説がないようですよ。赤色を意味する「丹」は、原種の花の濃い赤紫色からきていると考えられていますが、雄(オス)を意味する「牡」が使われているのは、中国では牡丹が「花の王」とされるところからも察しられるように、牡丹が男性的な花と見られているせいかもしれませんね。いずれにしても、遣唐使か空海が日本に持ち帰ったようですが、これを受けた日本の知識人たちが、「これぞ憧れの中国の花」とばかりに喜んで、中国の花名のままおしいただいたのではないのでしょうか。現在では大方の日本人の文化人たちは欧米流を貴んではいますが往時はかなり中国に対する憧憬感が強かったものと思われまます。

## 日本人の生活にしっかりと入り込んできた牡丹

日本に渡来してきた牡丹は、単弁花だったのですが、現在では品種改良が盛んに行われた結果、八重・千重、大輪・中輪と花形も多彩になり、花色も原種は紫紅色だったのですが、紅・白・紫・黄色などの大形の花が咲く牡丹が出回っています。しかし、従来は種からの栽培しかできなかったのでまさに「高嶺の花」だったのだそうですよ。栽培と品種改良の技術の開発と普及によって、牡丹は日本人の生活にしっかりと入り込んできたのです。日本特有のカルタの一種とされる花札に描かれている絵は、日本の花鳥風月をあらわすものですが、(1月)松、(2月)梅、(3月)桜、(4月)藤、(5月)菖蒲、(6月)牡丹、(7月)萩、(8月)ススキ、(9月)菊、(10月)紅葉、(11月)雨、(12月)桐となっていて、牡丹は4月の絵柄としておさまっています。牡丹の咲く時期の彼岸(春の彼岸)に供えられたり食べられたりする「牡丹餅」(ぼたもち)と同じ餅が秋の彼岸には7月の絵柄になっている萩からきた「おはぎ」と名称が変わるのも愉快ですね。また、猪肉を薄切りにし、牡丹の花に似せて皿の上に盛りつけた牡丹鍋(ぼたんなべ)も日本各地で食べられています。家紋にも牡丹が多く使われているのだそうですよ。文学・美術の世界でも牡丹の花盛り。日本文学に登場したのは『枕草子』が最初なんだそうです。即興俳人の高幡大馬王殿も、そんな日本人の生活に入り込んでいる牡丹の側面を取らえて、一言添えて次のような俳句を送ってくれました。

- ・牡丹咲き 唐獅子のごと 犬2匹 高幡大馬王
- ・愛犬も 凜と見えたり 牡丹咲く 高幡大馬王

牡丹といえば「唐獅子牡丹」が思い出されます。ツアーでよく行く飛騨高山の彫刻を拝んできました。愛犬と牡丹が咲いている前を散歩したら、可愛いワンちゃんも唐獅子のように見えるのでは??

## えっ、牡丹の花言葉に「人見知り」!?

牡丹には、「王者の風格」は、シルクを思わせる繊細な花びらが幾重にも重なり、豪華さと気品あふれる花姿に由来する「王者の風格」、「富貴」、「高貴」、「壮麗」、「風格あるふるまい」という花言葉がある反面で、「恥じらい」や「人見知り」といった“意外な”花言葉があります。「恥じらい」は芍薬の花言葉と重なるところですが、「適度に恥じらうからこそ本当に品があるのだ」と思う日本人の感性がここに示されているような気がしますね。一方の「人見知り」というのは、牡丹が植え替えを嫌う植物だということに由来しているようです。植え替えをすると、その場所で十分に根が張るまでは、地上部分が成長しないため、しばらくは花が咲かないのだそうです。それでもって「この花は俺に対して人見知りをしているんだから!」と腹を立てる人の気持ちも分かるような気もします。しかし、面白いですね、花言葉の諸相も。今後は「花の言葉」ではなくて「花言葉」により一層耳を傾けていこうかと思っています。